

## 啞俱樂部

新潟 晴 帆 生

此間海老名牧師が當地に於ての演説の中に、北越の人は冬の數ヶ月間は熊的生活をするもの蛇と極言されたが、それかあらぬか古來北越人士の一般的趣味は兎角座敷にのみ限られたかの様：：隨て唯珍しい什器を集めて自ら樂むとか、美事なる書畫類を展觀して人に誇るといふ様の事が専ら行はれて居たのが、今以て盛である事は骨董屋が在の旦那廻りを喜ぶ事や、ヘッポコ畫工が越後路へ入てから樂になつたと述懐するのでも大方推想し得らるゝ事と思ふので、それで誰々の椿山とか某々の大雅堂とかといふのが著しく勢力を彼等の間に振るつて居るので、唯もう數の多きを得たりとし名のよいのを以つて誇るといふ風、それで數さへ多ければよいか、名さへよければ宜いかといへば強ちにそうでもない、特に文人畫風言換ふれば漢畫の南宗といふ風が専ら推獎されて居つた、それに續ての北宗も上では雪舟とか元信とか下では文晁

邊が最も珍重されて居つた、現に多くの藏幅家の門を叩けば示さるるもの殆ど夫等のものに限るといつてもよい位、夫は明治に入つてから文人畫がひと仕切り非常に流行した事の時勢も加つてありませうが、何分昔から其方の盛な事は古來當地方出の名家と擧げられたる人達が殆ど夫等の派に限られて居つたのでも知る事が出来ませう、如此有様から自然に氣韻といふ事を第一義として、極端に之にかぶれて、其他の事は深く顧みないといふ様の状態で、煮ヌキ餛飩を列べた様の皺とかツク子芋を連れた如き皺でなければ高尚なる風韻は、求められなものの様に思込まれて居つたのです、夫ですから、比較的形態や色彩などの方面にも力を入れた所の圓山其他の流派の者は深く味ふに足らぬ位に思はれて卑められて居つたといふ譯、まして好尚の頗る異つた洋畫を見てフムよいなあ寫真かといつたきりで再び顧みない様なのも無理はないのです、併ながら時勢の潮流今何時迄もかくあるを許さないのは自明の理で、交通がよく開けてから此方彼等の好尚も追々變て來たので

す、一方漢畫がかく持て囃さるゝと共に新美術(美術院流風をかく  
いる得べくんば)なども歡迎さるゝに至つたといふ風に：：夫で洋畫の方でも未だ微々たるものですが、此潮流に順ふて少宛乍ら發展はして居ります、所に依つては五六の同勢で研究して居るのをホッポツ見受くるのですが、當地には吾々如き少部分を除ては之を遣つてる人を見受けません、唯中學と師範の生徒とが各會を立て、斯道を鼓吹してゐるのみです、中學の方では其立雲會年々の展覽會に幾多の其校出身の美術學生が大なる後援を與へ美しき光彩を添えて居りますが、寫生も中々遣つて居つて隨分元氣がある、師範のは啞俱樂部といつて近來は目つ切り盛になつて在校生のみで大に振て居る、元來此會は此邊の人がワツトマン紙木炭紙はおろか水彩繪具さへ知らなかつた六七年前既に呱呱の聲を擧げたもので、一盛一衰はあつたが兎に角當地で斯道の先鞭をつけて各所の教育展覽會に其抱負を示して居つたのです、夫で年々同じ様の體裁の臨畫のみを繰返すといふ風であつたのが、昨年頃からは餘程變つて著しく寫生

風に傾いて来て居る、時世とはいへ之は眞に喜しい現象で一層此機運を助成しもたいのです、此間其展覽會を遣つたのですが中々盛況で相應に満足の結果を得たと思ふのです、墨繪も中々奨励したのですが、先づ

六七十點中にも數葉の全紙への鉛筆畫及び多くの木炭畫などは大に振つて居たのです、水彩畫は特に多かつたので、三百余點中に中々見るべきものも、少くはなかつたのです、遣口は一才的學生が天才に任せなぐり付けたといふ様に見えたのも少くはなかつたけれども、臨畫の方は概して沈着して稍活氣のある、色を例に依てアツサリした使ひ振りであるから神秘的深甚なる感想を興へないが、一寸誰にても好かれさうで心持のよささうに見受けらるゝが、ともすると深みを缺いた薄いものなるのは殊に惜しと思ふたのです、其他多くの平常成績は大に發育的價値を發揮した譯で、心ある人の着目する所となつたのです、又手工科製作品の併列は一才目先の變れる所から一ト際人目を喜ばせました、何分地は高燥なり日は兩日に渉て好晴と來て居るので

すから、來觀者甚多く近來にない盛會であつて豫想外の成功でした、僅の事ですが運動會の色々の運動を模様化したのなどは著しく小學生徒等の興味を呼び起して實に面白い事でした。

兎に角平常他校に比しては時間も多く又年中色々の會に攻め立てられて居るに係らず如此成功を博し得た事は大に多とすべき事です、殊に學校の性質上始中終教育に結び付くるといふ事には出來得る丈け注意を拂ふたのでした、且つ又此等の機會を利用して出來得る丈け生徒の自發的觀念を養はしむるといふ寸法で、殆ど會の始終を彼等をして處置せしめたのですが、至極敏活に申分なく處置されて實に結構の事でした。要之此度の會も慥に良き影響を一般に與へ得たと思はるゝのですから、之が追々發展して一般の好尚に結び付くといふ事も想像し得らるるので、それが近くはないかも知れませんが又遠い將來の事でもなからふと信ずるのです。

(四十年十二月末稿)

## 朝の寫生

K T 生

午前五時といふに、繪具箱、ブロック抱へて森に入る。日は未だ出でず、自然はおぼろ／＼の夢に似たり。空は希望に滿てる薔薇色の笑を洩し、霧は草をおおひ、樹に罩めて、偉大なる中景の樹、色彩いよく柔かに趣益々深く今や萬物は、今日一日の初めの、汚れなき美と、神聖とを歌へり。柔草の茂れる所、露しきりにこぼれ、冷風軟かに畫布をかすむ、瞬時！我は汚れたる我にあらずして、美しき自然の讚美者なりき。

## みどり洋畫會

◎創立明治四十一年一月一日◎事務所横濱市尾上町三丁目四十番地島内みどり洋畫會◎目的としては毎年二回展覽會及び毎月一回畫葉書順送批評會を催ふし其他に研究材料品を備へて會員に貸與し専ら會員相互の洋畫に關する思想及び技術の發達を圖る◎機關雜誌「みどり」を毎年四回發行して會員に配付す◎會員は東京、横濱、地方に居住する同好有志にて皆青年なり學事の餘暇或は専門にして研究する者等にて現在の處二十四名を有す尙ほ昨今募集中なり右大略を御報告申上候

みどり洋畫會幹事代理

北山清太郎(通信)